

第9章 語彙指導

キーワード

語彙, ボキャブラリー, 単語, 記憶

アブストラクト

本章ではまず, 語彙を覚えるとはどういうことか, どのような単語を覚えるべきか等, 語彙習得に関する基本的な問題について検討する。その後, 研究をもとに効果的な語彙指導の原則について論じ, 原則に基づいた実践例を紹介する。

1. はじめに

英語学習者にとって, 語彙習得は大きな課題の1つです。みなさんの中にも, 単語がなかなか覚えられず, 苦勞された経験がある方がいらっしゃるかもしれません。また, 英語教師として教壇に立った方であれば, 「どのようにすれば英単語を効果的に覚えられますか?」と学習者から質問されたことがあるのではないのでしょうか。“Without grammar very little can be conveyed, without vocabulary nothing can be conveyed” (Wilkins, 1972, p.111) という言葉に示されている通り, 語彙は外国語学習者にとって最も重要な知識の1つであると考えられます。語彙習得を促進するために, 英語教師には何ができるのでしょうか?

語彙の専門家である Nation は, 語彙習得に関して, 教師がやるべきことは4つあると指摘しています (Nation, 2008)。それらは重要な順に, (A) プランニング, (B) 語彙学習方略の指導, (C) 語彙力の測定, (D) 語彙教授の4点です。1つ目のプランニングとは, カリキュラム全体を通して適切な語彙が導入され, それらが様々な活動でバランスよく使用されるよう, 計画することです。第2に, (B) の効果的な語彙学習方略 (ストラテジー) を指導する必要があります。これには, 辞書や単語カード等の効果的な使用法を学習者に身につけさせることが含まれます。第3に, 学習者

がどのような語彙を知っており、カリキュラムを通して語彙力が上がっているかを、教師はテストする必要があります。最後に、新出単語の意味や用法を説明する等、実際に語彙を教えること（語彙教授）も教師の仕事です。

ここで注目すべきは、語彙教授よりも、プランニング、語彙学習方略の指導、語彙力の測定の方が重要であると Nation (2008) が指摘していることです。限られた授業時間で必要な語彙を全て教授するのは非現実的であるため、実は語彙指導は一斉授業には適していません。したがって、教室内での語彙教授の重要性は相対的に低く、教師はプランニングや学習方略指導等に力を注ぐべきなのです。Nation の指摘を踏まえ、本章ではプランニング・方略指導・語彙力測定も視野に入れた上で、語彙習得を促進するための方法について考えてみたいと思います。

2. 理論

2.1 語彙を覚えるとはどういうことか

効果的な語彙指導を考える前に、語彙を覚えるとはどういうことかを考えてみよう。語彙知識には様々な側面があるが、サイズ (size) と深さ (depth) の2つに分けて考えることが一般的である。サイズとは、広さ (breadth) とも呼ばれ、知っている単語の数である。深さとは、個々の単語についてどのような知識を持っているかを指す。

語彙知識の深さとは、具体的に何を指すのだろうか？ 語彙知識の構成要素に関して最も広く知られているのは、Nation (2013) の提唱する枠組みである。Nation は、語彙知識には少なくとも

発音、スペリング、接辞や語根 (word parts)、語形と意味の結びつき、概念と指示物、連想、文法的機能、コロケーション、使用に関する制約

の9つの側面があると指摘している。また、9つそれぞれに関して、受容知識と産出知識がある。受容知識とは、リスニング・リーディングの際に使用する知識であり、産出知識とは、ライティング・スピーキングの際に使用する知識である。たとえば、ある単語の発音を聞いて、その単語を認識するのが発音の受容知識であり、自分で発音できるのが産出知識である。

語彙習得は時間がかかるプロセスであるため、一度に9つの側面の受

容・産出知識を習得することは、現実的ではない。9つの側面の中では、語形と意味の結びつきに関する知識が最も重要だと考えられている。語形と意味の結びつきとは、たとえば、apple という英単語を見て「りんご」という意味であるとわかったり、「りんご」という意味から apple という英単語が頭に浮かぶことである。したがって、まずは語形と意味が結びつけられるように指導し、その他の側面はその単語に繰り返し出会っていくうちに徐々に習得させるのが現実的であろう。

2.2 どのような単語を覚えるべきか

次に、どのような単語を覚えるべきかについて考えてみよう。単語の有用性の最も一般的な基準は、その単語の出現頻度である。出現頻度を調べる際には、British National Corpus (以下、BNC) などのコーパス (corpus) を使用することが一般的である。コーパスとは、ある目的のために体系的に収集された電子テキストのことである。たとえば、動詞 take は BNC に約17万回出現しているが、extract は約3,000回しか出現していない。この場合、より出現頻度が高い take の方が、より有用であると考えられる。英語においては、最も頻度が高い2,000ワードファミリーを高頻度語 (high-frequency words) と分類するのが一般的である。ワードファミリーとは、ある英単語の屈折形 (名詞の複数形や動詞の過去形等) と派生語を含めて、1語と数える方式のことである。たとえば、walk のワードファミリーには、walked, walking, walks, walker, walkers, walkable が含まれる。

単語の出現頻度に関して重要なことは、ごく少数の単語があらゆるテキストの大部分を占め、それ以外の大多数の単語は、ほとんどまれにしか出現しないということである。たとえば、英語においては、最も頻度が高い2,000ワードファミリーは BNC 全体の86.0%を占めるが、それ以外の18,000ワードファミリーは12.8%のみにしかならない (Nation, 2013)。例えるなら、英語には働き者の単語2,000と、怠け者の単語その他大勢があるということである。働き者の単語2,000は一見簡単に見えるが、多義語であったり、機能語であったりと、実際に使いこなすのは難しいことが多い。一方で、怠け者の単語は、レジスターや話題に特化した具体的なものが多く、頻度は低いが、覚えやすいものも多い。授業で語彙指導を行う際には、高頻度語を最優先し、怠け者の単語に貴重な授業時間を費やさない

ように注意すべきであろう。これは Nation (2008) の言う (A) プランニングの一例である。また、語彙知識を (C) 測定 (テスト) する際にも、高頻度語を優先して出題するようにしたい。単語の頻度レベルは、Compleat Lexical Tutor (www.lextutor.ca/vp/) 等の web サイトで確認することができる。

高頻度語2,000を習得した後は、Academic Word Listに含まれる語を学習することが推奨されている。Academic Word Listは大学レベルの教科書や論文など、学術分野で頻度が高い570のワードファミリー(例、analysis, economic, distribution, environment)が収録された語彙リストであり、web サイト“The Academic Word List”で公開されている。

2.3 語彙の意図的学習と偶発的学習

語彙学習活動は、意図的学習 (intentional learning) と偶発的学習 (incidental learning) とに大別される。意図的学習とは、語彙習得を主目的とする活動の中で、語彙を学習することである。たとえば、単語帳や単語カードを用いた学習は、意図的学習に分類される。一方で、偶発的学習とは、語彙習得が主目的ではない活動の中で、付随的に語彙が習得されることを指す。たとえば、洋画を見ている際に、出てきた単語の意味を文脈から自然に習得したとする。語彙学習をするために洋画を見ているわけではないため、このような学習は偶発的学習に分類される。

意図的学習と偶発的学習は、どちらも一長一短であると指摘されている。意図的学習の利点は、短時間で多くの語彙を学習することができるということである。しかしながら、語形や意味以外の側面は学習が困難であるという欠点もある。偶発的学習の利点は、コロケーション・文法的機能・使用上の制約等、語彙知識の様々な側面が習得できることである。一方で、偶発的学習は時間がかかり、意図的学習ほどは効率が良くないという欠点がある。

このように、意図的学習と偶発的学習はどちらも一長一短があるため、両者をバランスよく組み合わせ、相補的に用いることが重要である。しかし、高頻度語2,000を習得していない学習者は、文脈から偶発的に学習するための語彙が十分でないため、意図的学習を用いることが推奨されている。中学校低学年の段階では意図的学習を重視し、学年が上がるにつれ徐々に偶発的学習を導入する ((A) プランニング) ことが現実的であろう。

3. 研究——効果的な語彙指導の原則

1980年代以降、数多く行われている語彙指導研究から、効果的な語彙指導に関して、以下のようなガイドラインを導き出すことができよう。

3.1 単語の意味はどのように与えるべきか

未知語の意味は日本語と英語、どちらで与えるべきであろうか？ 研究では、母語 (L1) を用いて意味を与えた方が、学習対象語 (L2) で与えた場合よりも定着率が高いことが示されている。しかしながら、和訳と英単語の意味は必ずしも一致しないため、和訳では正確な意味範疇を伝えることはできないことも認識すべきである。たとえば、「gather=集める」と覚えていると、I like *gathering stamps. (正しくはcollecting) のような負の転移 (negative transfer) による誤用につながる可能性がある。

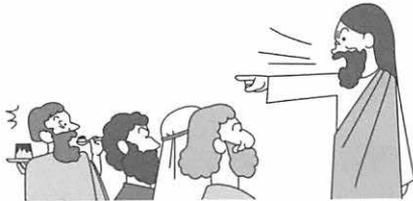
また、多義語に関しては、コア・ミーニング (core meaning: 単語の中心的な意味) を与えることで、習得が促進される可能性が示されている。たとえば、stress には「(1) 圧力 (2) 緊張, ストレス (3) 強調 (4) ~を強調する」等の意味があるが、「力がかかる」というコア・ミーニングを提示することで、多義の習得が容易になると考えられる。具体名詞に関しては、写真やイラスト等の視覚情報が記憶保持を促進することも示されている。

3.2 語彙の創造的使用

語彙の創造的使用 (creative use) とは、すでに学習した単語に以前とは異なる文脈で遭遇したり (input), 以前とは異なる文脈でその語を使用する (output) ことである (Nation, 2013)。創造的使用により、その単語に関するより正確な知識を身につけることが可能になる。たとえば、ある学習者が He broke the cup という文脈で、break という語に初めて出会ったとする。この学習者は、break は具体名詞のみを目的語にとる動詞であると考えられるかもしれない。このような学習者が、break the record / promise, have a break 等の用例に接することで、break は抽象名詞も目的語にとることができ、また名詞としても使用できるという知識を得ることができる。既知語を提示する際には、以前とは異なる意味・コロケーション・活用形・品詞・構文を用いることで、創造的使用を促進するように心がけたい。

3.3 キーワード法

語彙習得に効果的な方法の1つに、キーワード法 (keyword method) がある。キーワード法は、以下の2つのステップで行う。第1に、学習したい英単語に似た日本語のフレーズ (これをキーワードと呼ぶ) を考える。その後、学習したい英単語とキーワードを結びつけるイメージや文章を考える。たとえば、discipline という英単語を覚える際には、discipline に似た発音の「弟子プリン」がキーワードとなる。その後、「弟子、プリンを食べないようにしつける」(中田 & 水本, 2015) 等、discipline と「弟子プリン」を結びつける文章やイメージを考える。



キーワード法の利点は、仮に discipline の意味を忘れてしまったとしても、「弟子プリン」というキーワードを覚えていれば、キーワードをきっかけに意味を思い出せる可能性があるということである。ただし、英単語によってはキーワードを思い出すのが難しい場合もあるだろう。そのような単語に関しては、接辞・語根、例文、フレーズ、カタカナ英語等、意味を思い出す何らかのきっかけを提示するようにしたい (以下の表を参照)。

	具体例
接辞・語根	import は im 「中に」+ port 「運ぶ」ので「輸入する」
借用語	テニスのフォルト (fault) はサーブミスのことなので、「fault = 誤り、欠点」
例文	“Boys be ambitious!” から「ambitious = 野心を持った」
フレーズ	Prime Minister は総理大臣だから「minister = 大臣」

表1 単語の意味を思い出すきっかけ

(具体例はいずれも中田 & 水本, 2015より)

3.4 テストが記憶を強化する

単語をただ眺めるのではなく、単語に関する記憶を能動的に想起することで記憶が強化されることが研究により示されている (Karpicke & Roediger, 2008)。たとえば、「exhaust=『使い果たす』です」と教えてもらうよりも、「exhaustの意味は何ですか?」とテストされた方が、より長期的な保持につながるということである。これは、テスト効果 (testing effect) と呼ばれる現象である。語彙指導においてはこのテスト効果を積極的に活用したい。

テストといっても、必ずしも筆記テストをする必要はない。たとえば、授業中に単語の意味を学習者に尋ね、発言させることもテストの一種である。また、単語カードを使用して英単語から和訳、あるいは和訳から英単語を思い出す自己テスト (self-testing) から、テスト効果が期待できる。

3.5 語彙の最適な復習間隔とは

新出語を覚えたとしても、時間とともにその記憶は減衰し、やがて忘却されてしまう。記憶を定着させるためには、定期的な復習が欠かせない。それでは、どのような復習スケジュールが最も効果的なのだろうか? 記憶に関する研究から、最適な復習のタイミングは保持期間 (retention interval: 学習と事後テストの間隔) に影響されることが示されている。具体的には、保持期間の10%~30%程度の間隔で復習を繰り返すことが、最も高い保持率に結びつくという説がある。たとえば、ある単語を1カ月後に覚えていたいのであれば、3~9日間の間隔 (30日×10%~30%) で復習を繰り返すのが最も良く、12カ月後に覚えていたいのであれば、1.2~3.6カ月の間隔 (12カ月×10%~30%) で復習を繰り返すのがよいということである。

また、復習間隔については、1日後→1週間後→2週間後→4週間後等、復習の間隔を少しずつ大きくしていく拡張型スケジュール (expanded rehearsal または expanding spacing) が効果的であると主張されることがある。しかしながら、近年の研究では拡張型スケジュールの有効性は必ずしも実証されていない (Nakata, 2015)。

3. 6 干渉を避ける

新出語を提示する際に、同義語・類義語・反意語等、意味的に関連した単語を同時に提示することは一般的であろう。しかしながら、意味的に関連した単語を同時に提示すると、それぞれが干渉を起こしてしまうため、語彙習得が阻害される可能性が示されている。したがって、同義語や反意語等、意味的に関連した未知語を同時に提示することは避けるべきであろう。曜日・動物の名前・色の名前等、同じカテゴリーに属する単語を同時に提示することも同じく避けるべきである。ただし、提示される語の大半が既知語である場合は、その限りではない。意味的に関連した既知語をまとめて提示し、それらの類似性・関連性を整理することは、学習者の頭の中に豊かな英単語のネットワークを形成することにつながるため、有益であると考えられる。

4. 授業での活用

今まで紹介した研究をもとに、教室での具体的な語彙指導法について考えてみよう。ここでは、以下の3つの活動を紹介する。

4. 1 **アクティビティ 1** フラッシュカードを用いた単語の練習 (中学校)

【所要時間】 約5分～10分

【教材・準備物】 片面に英単語、もう片面に和訳を書いたフラッシュカード。和訳の代わりに、単語の意味を表すイラストや写真を用いることもできる。

【活用場面】 基本的な英単語のスペリングと発音が結びついていない、中学校1年生の導入的な授業で活用できる。また、中学校2年生以上でも、新出語彙の復習等の用途で、毎回の授業に組み込むことができる。

【概要】 フラッシュカードを用いて、単語を1つずつ提示し、学習者に発音させることで、スペリングの受容知識および発音の産出知識の習得を目指す。また、英単語を提示しその和訳を答える、和訳を提示しそれに対応する英単語を答えるという活動を行うことで、語形と意味の結びつきを強化することもできる。

パソコンが利用できる環境であれば、パワーポイント等を使用してフ

ラッシュカードを作成してもよい。パソコンを使用すれば、文字や画像に加えて音声を提示する、一定時間が経つと自動的に次の単語を提示する、単語の先頭から1文字ずつ表示し学習者に単語を類推させる、単語を提示する際にアニメーションを設定するといったことが可能になる。



図1 パワーポイントにより作成されたフラッシュカードの例

【留意点】フラッシュカードを用いる際には、以下の点に留意するとよい。

第1に、フラッシュカードに英単語の意味を書く際には、英語ではなく日本語で書くこと。これは、母語を用いて意味を与えた方が、学習対象語で与えた場合よりも定着率が高いことが示されているからである。

第2に、単語をただ提示するだけでなく、英単語を見て発音する、英単語から和訳を思い出す等、何らかのテストの要素を持たせること。これは、記憶をテストすること自体に学習効果があるというテスト効果 (Karpicke & Roediger, 2008) に基づく。

第3に、フラッシュカードを毎回シャッフルし、順番を変えること。毎回同じ順番で単語を学習していると、単語の提示順序が記憶の再生を支援してしまうことがある。これは、リスト効果 (list effect) と呼ばれる現象である。並び順という手がかりがなくても思い出せるようにするために、リスト効果は避けるべきである。

第4に、単語の発音や意味を瞬間的に思い出せるようにトレーニングをすること。コミュニケーションで単語を使うためには、ゆっくり考えてやっと思い出せるというだけでは不十分である。思い出すまでの時間に制限時間をつけることで、語彙知識の流暢性 (fluency) を伸ばすことができる。

第5に、和訳や英単語を思い出す活動をする際には、受容学習(receptive learning)と産出学習(productive learning)の両方を行うこと。受容学習とは英単語から意味を思い出すことであり、産出学習とは意味から英単語を思い出すことを指す。これまでの研究から、受容学習は受容知識の習得に効果的であり、産出学習は産出知識の習得に効果的であることが示されている。したがって、受容知識と産出知識をバランスよく習得するには、受容学習・産出学習を両方行うことが望ましい。

最後に、同義語・類義語・反意語等、意味的に関連した単語を同時に提示すると、干渉を起し語彙習得が阻害される可能性があるため、意味的に関連した未知語をセットにして一度に学習することは避けること。**【工夫】** 単語の一部を虫食い状態にして提示するフラッシュカードを作成してもよい。たとえば、“interesting”の代わりに“int_rest_ng”, “conversation”の代わりに“c_nve_sati_n”というカードを作り、元の単語を類推することができるかどうか、学習者に考えさせる。このような変則的なフラッシュカードを盛り込むことで、パターン認識力を高めると同時に、学習者の興味を持続させることができる。また、制限時間内でいくつかの英単語・和訳を思い出せるかどうかを、グループ間で競わせてもよい。さらに、教室外でも学習者が自主的な学習の一部として取り入れられるように、効果的なフラッシュカード学習のための方略指導をすることが望ましい。パソコンやスマートフォン等で利用可能なフラッシュカード・プログラムを利用することもできる。

4. 2 **アクティビティ2** 穴埋め問題 (中学校)

【所要時間】 約10分～20分

【教材・準備物】 復習したい語彙が空所に置き換えられた穴埋め問題

【活用場面】 リーディング・テキストで出てきた新出語彙の復習等、既習語を定着させたい時

【概要】 穴埋め問題は語彙の復習等で広く用いられていると同時に、語彙習得に効果的な活動である。ここでは、穴埋め問題をより効果的にするための方法について考えてみよう。たとえば、break, such, proud という語を復習したいとする。これらの語を学習対象語とする穴埋め問題としては、以下のような例が考えられる。

1. Be careful not to () the camera!	カメラを壊さないように気をつけてね!
2. I have never seen () a beautiful photo.	私はそんなにきれいな写真は見たことがありません。
3. I'm so () of you for winning the contest.	君が優勝して、僕は本当に誇りに思うよ。

正解：1) break, 2) such, 3) proud

穴埋め問題は、単語に関する記憶を想起することが求められるという点で、テストの一種である。したがって、穴埋め問題はテスト効果を生かした効果的な語彙学習活動であると言える。

次に、穴埋め問題の効果をさらに高める方法について考えてみよう。1つの方法として、1つの学習対象語に対して複数の設問を用意することが考えられる。具体例としては、以下のようなものが考えられる。

1. Be careful not to () the camera!	カメラを壊さないように気をつけてね!
2. I have never seen () a beautiful photo.	私はそんなにきれいな写真は見たことがありません。
3. The boy was sad because his father () the promise.	父親が約束をやぶったので、その少年は悲しかった。
4. I'm so () of you for winning the contest.	君が優勝して、僕は本当に誇りに思うよ。
5. Summer () is starting soon! I'm very excited!	夏休みがもうすぐ始まる。とても楽しみだ!

正解：1) break, 2) such, 3) broke, 4) proud, 5) break

1つの学習対象語に対して複数の設問を用意する際のポイントは、同じ語に関する設問が連続しないようにすることである。たとえば、上の具体例では break に関する問題が設問 1・3・5 と分散している。これは、同じ単語の学習間隔を空ける方が長期記憶を促進するという分散学習効果 (distributed practice effect; Nakata & Webb, 2016a) に基づくものである。

さらに、1つの学習対象語に対して複数の設問を用意する際は、同じ単

語を異なる意味・コロケーション・活用形・品詞・構文等で用いることで、創造的使用を促進するように心がけたい。たとえば、設問1では break が具体名詞 camera を目的語にとっているのに対し、設問3では抽象名詞 promise を目的語にとり、比喩的な意味で使用されている。さらに、設問1では動詞の原形、設問3では動詞の過去形、設問5では名詞として break が使用されている。このように、ある単語を新しい文脈で使用して創造的使用を促進することで、既知語に関するより正確な知識を身につけることが可能になる。時間等の制約から1つの語に対して複数の問題を用意するのが困難な場合は、教科書とは異なる用法を穴埋め問題で提示するとよい。たとえば、教科書では break が動詞として使用されているのであれば、穴埋め問題では名詞的用法を用いることで、創造的使用を促進することができる。

【工夫】 穴埋め問題が学習者にとって難しすぎる場合には、初めの1語を与える（例. b _____ ）、文字数を与える（例. _____ ）、語群を与えてその中から答えを選ばせる等の工夫を行うことで、難易度を調整することができる。

穴埋め問題は個人で行うだけでなく、以下のような手順でペア活動として行うことも可能である。(1) 穴埋め問題を配布し、個人で解答させる。(2) 学習者を2つのグループに分ける。グループAには奇数問題の正答を、グループBには偶数問題の正答を配布し、各自で答え合わせをさせる。(3) 別グループの学習者を探し、ペアになる。(4) 自分が模範解答を持っていない問題の文章を口頭で読み上げる練習をする。読み上げられた答えが間違っていたら、パートナーが口頭で正しい答えを伝える。この手順を繰り返す。

すべての問題を一通り練習した後は、学習対象語以外も空所にした、より難易度の高い穴埋め問題（例. Be c _____ not to b _____ the c _____ !）を配布し、再度ペア活動を行ってもよい。また、穴埋め問題の和訳部分のみを見て、和訳から英文を再生するペア練習を行うことで、スピーキング練習に発展させることもできる。

穴埋め問題は効果的な活動であるが、作問に手間がかかるという欠点もある。穴埋め問題の作成を支援する web サイトとして、Multi-Concordance (<http://www.lex Tutor.ca/conc/multi/>) が挙げられる。この

web サイトに英単語を入力すると、その英単語を正答とする穴埋め問題を自動的に作成することができる。生成された問題が学習者にとって難しすぎる可能性もあるため、最終的には教師が確認・編集することが欠かせないが、作問の手間をある程度削減することが可能になる。なお、Multi-Concordance で穴埋め問題を生成する際には、"Choose corpus" というオプションから "1k Graded Corpus" を選択しよう。このオプションを選択することで、1000語レベルの高頻度語のみが含まれた穴埋め問題を作成することができる。

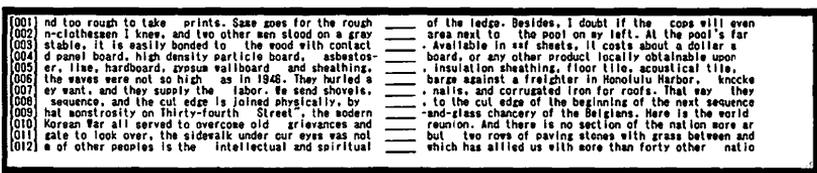


図3 Multi-Concordance の web サイトによって自動作成された穴埋め問題の例。空所には "cement" が入る。

4. 3 アクティビティ3 リーディング授業での語彙指導 (高校)

【所要時間】 約20分

【教材・準備物】 精読用のリーディング・テキスト

【活用場面】 リーディング授業

【概要】 高校のリーディング授業では、多くの新出語が出てくる。リーディング・テキストに出てくる新出語はどのように提示・指導すればよいのだろうか？ ここでは、以下のテキストをもとに、効果的な新出語の扱いについて考えてみよう。

The Earth is often called "The Water Planet" because over 70 percent of its surface is covered with water. Almost all of the water, however, is seawater and only 0.01 percent of it is good for drinking. About 900,000,000 people, one eights of the world population, cannot drink safe water.

The World Wide Fund for Nature (WWF) says _____

by improving water supply systems and solving climate problems.

(*Genius English Communication 1* より)

上のテキストでは、*surface*, *management*, *pipe*, *climate*, *glacier* 等の語が新出語である。これらの新出語の意味を提示する方法として、(1) 語注や解説等で教師が意味を与える、(2) 文脈から推測させる、(3) 辞書で調べさせるという3つの方法が考えられる。(2)・(3)の方法には時間がかかるため、効率を重視するのであれば、(1)の方法が好ましいと考えられる(なお、単語の意味を学習者に与えるよりも、文脈から推測させた方が記憶に残りやすいと主張されることがあるが、研究では必ずしもそのような結果は得られていない)。教科書に語注が付いていない場合は、教師が自作する必要があるが、「Gapsse」等のフリーウェアや、「英文テキスト・発音記号変換」等のwebサイトを用いることで、和訳や発音記号を含む語注を自動的に作成することができる。

もちろん、辞書使用や文脈からの意味推測は、重要な学習方略である(Nation, 2013)。したがって、これらの方略を教えるのが目的であれば、(2)・(3)の方法を使うこともできる。また、高頻度語や内容理解に重要な単語の意味は学習者に調べさせ、その他の単語の意味は教師が与えるという折衷案も考えられる。webサイト“Compleat Lexical Tutor”によると、*management* は1000語レベル、*surface* は2000語レベルの高頻度語であるのに対して、*glacier* は12000語レベルの低頻度語である。したがって、*glacier* の意味は語注等で与え、*management*, *surface* の意味は文脈から推測させたり、辞書で調べさせるのもよいであろう。視覚情報が記憶を促進することが示されているため、具体名詞の意味を提示する際には、写真やイラストを合わせて提示することも考えられる。写真やイラストを検索する際には、「Google 画像検索」が有益である。たとえば、Google 画像検索で *glacier* を検索することで、*glacier* が具体的に何を指すのか、学習者は視覚的に把握することができる。

これまでの研究から、借用語 (loanwords) 等の同族語 (cognates) は、非同族語に比べ習得が容易であることが示されている (Rogers, Webb, & Nakata, 2015)。日本語には英語起源の借用語 (カタカナ語) が数多くあるため、これらのカタカナ語を積極的に活用したい。上のテキストでは、

pipe が「パイプ」、percent が「パーセント」、cover(ed) が「カバー」と関連があることを指摘すればよいであろう。その他、management はマネージャー (manager)、warming はウォーミング・アップ (warming up) 等、身近なカタカナ語と関連していることを指摘すれば、語彙習得を促進することが可能になる。もちろん、日本語の「マンション」と英語の mansion のように、カタカナ語の意味が本来の英単語の意味とずれている場合もある (false friends)。その際には、意味の違いについて説明することが必要である。

本章2. 1 で述べた通り、語彙知識には接辞や語根、文法的機能、コロケーションに関する知識も含まれる。接辞や語根に関する知識は語彙習得を促進するため、有益な接辞や語根が含まれる単語が登場した際には、その都度指摘することが望ましい。上のテキストでは、management には -ment、shortage には -age という接尾辞が含まれていることを指摘するとよいであろう。また、supply、increase はともに名詞・動詞として用いることができる等、文法的機能に関して触れることも重要である。

コロケーションに関する知識は正確で流暢な言語使用を促進するため、新出語を指導する際にはその語を含むコロケーションをいくつか提示することも望ましい。ある単語がどのようなコロケーションで用いられるかを検索する際には、“Just the Word” 等の web サイトが有用である。たとえば、Just the Word で management を検索すると、risk / waste / poor management、top / senior / middle management、management plan / system / team 等のコロケーションが一般的であることがわかる。これらのコロケーションを紹介することで、語彙の創造的使用を促進し、その単語に関するより正確な知識を身につけることが可能になる。

読解テキストに登場した新出語のうち、特に重要な単語 (例、高頻度語であり、有益な接辞・語根を含む単語) に関しては、穴埋め、英作文、マッチング、クロスワード等のエクササイズを用いて練習するのが望ましい。効果的なエクササイズ的具体例は、Nakata & Webb (2016b) 等に紹介されている。

ADJ *management*

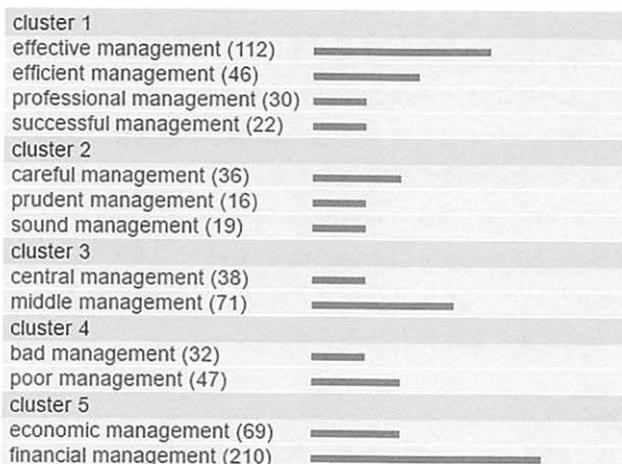


図3 web サイト“Just the Word”における
management の検索例

5. おわりに

本章では、語彙を覚えるとはどういうことか、どのような単語を覚えるべきか等、語彙習得に関する基本的な問題について検討した上で、効果的な語彙指導の原則について論じた。さらに、原則に基づいた実践例として、3つの活動を紹介した。“The real intrinsic difficulty of learning a foreign language lies in that of having to master its vocabulary” (Sweet, 1899, p.66) という言葉に示されている通り、語彙習得は外国語習得において最も困難な側面の1つであると考えられる。習得すべき語彙数に際限がなく、さらに語彙知識に数多くの側面が含まれることを考えると、あらゆる語彙のあらゆる知識を効果的に習得できるような万能薬はない。語彙指導を成功させるカギは、特定の方法論に偏ることなく、様々な指導法をバランスよく組み合わせることであると言えよう。

◆ ディスカッション・クエスチョン

- 1) 日本では市販の英単語集が広く使用されている。市販の英単語集を用いた学習の利点と欠点は何だろうか。また、英単語集の学習効果を高めるためには、どのような工夫が必要か考えてみよう。
- 2) 語彙知識は、サイズと深さの2つに分けて考えることが一般的である。他にも語彙知識の側面として考えられるものはあるだろうか。
- 3) mention, struggle, candy, notebookのうち、高頻度語はどれだろうか。webサイト“Compleat Lexical Tutor”を使って調べてみよう。
- 4) developという単語のワードファミリーには何が含まれるだろうか。できるだけ多く書き出してみよう。

◆ 文献案内

- ① 望月正道, 相澤一美, 投野由紀夫 (2003) 『英語語彙の指導マニュアル』
東京：大修館書店

第二言語語彙習得に関する入門書。主な読者として現場の教師を想定しているため、非常にわかりやすく解説されている。語彙指導に役立つwebサイトやソフトウェアも紹介されている。

- ② 門田修平 (2003) 『英語のメンタルレキシコン：語彙の獲得・処理・学習』東京：松柏社

語彙がどのように学習され、その知識がどのようにアクセスされるかについて心理言語学的な観点から論じた書籍。①の書籍と比較すると、より理論的な側面に関心がある読者に向いている。

- ③ Nation, I. S. P. (2013). *Learning vocabulary in another language* (2nd ed.). Cambridge, UK: Cambridge University Press.

第二言語語彙習得に関する最も包括的な専門書。語彙習得に関する数多くの先行研究・理論が紹介されている。さらに、語彙習得を促進するためのアクティビティも幅広く紹介されているため、研究者だけでなく、教師にとっても有益である。